

雑 感

元良 誠三 (船舶)

先日ある地方の私立大学の教職員の人達と懇談する機会があったが、いろいろな質問や話題が出た中に、「先生は運命論者ですか?」という質問があった。余り予期していなかった質問なので皆笑い出し、私も一寸こまって、「何もかも運命で決められていて、従って何をしても同じだといったニヒルな運命論者ではないが、やはり努力丈では解決出来ない運命のようなものがあると感じている。」と一応答えたが、帰りの汽車の中で、ふだん余り考えても見なかった運命というものについて、つくづくと考えながら、しばし感慨にふけたことである。

誰でもこんなことは一、二度は経験している事かと思うけれども、私は死にそこなつたと思うことが二度ある。一度は中学校のとき白馬のふもとの落倉という所に初めてスキーに行った時のことである。

スキー場は発電所の上の緩勾配の所にあつてスロープの一番下にロッジがあり、ゲレンデは広くゆるやかで全く安全に見えた。或る日レッスンの終わった自由時間に、私は2、3の友達とゲレンデの横の凸凹の新雪の所を今で言うならモトクロスでもやっているような気分で滑っていた。多少曲れるようになって得意になって滑っていた所、行手に友達が集って手を振っているの、呼んでいるのかと思つてそちらに滑っていった。ところが、近づいて見ると赤旗が立っており、丸い穴がぼっかりあいていて、友達は来るなと云つて手を振っていたのが判つたが既に遅く、穴の手前でやつと習い立てのクリスチャニヤで横になつたものの、勢い余つて頭から真逆様に穴に落ちてしまった。幸いスキーの先端と後端が辛うじて穴の縁にひつかかつて私は中ぶらりんの形で穴の中にぶら下がつたわけである。所が穴の中は川であつて、真暗な中を雪解水が頭の下を裏々と流れているではないか。川の上に積つた雪が春先になつて陥没して穴があいていたわけである。その川は発電所のペンストックに流れ込んでいる川であることが後で判つた。

私は夢中で身体を折り曲げてスキーに抱きつき、友達が力を合わせてやつと穴から引きずり出してくれた。その場はあまりとっさの事で、何だかよく判らず、友達によれば私は笑つていたと云うが、後から考えて見てあらためてゾツとした。私が穴の丁度中央手前に横に止まつたため、スキーの先端と後端が辛うじて穴の縁にひつかかつてあ

り、当時の簡単なビンディングが、ぶら下つても外れなかつたことも、奇跡としか云いようがない。

もう一度は戦時中海軍技術中尉として、佐世保海軍工廠に勤務していた時のことである。溶接を担当していた私は、溶接部のX線検査装置が新たに入荷したので、その格納場所を物色して、船台の頭の所にある防空壕に白羽の矢を立てた。そこで上司であり先輩である川島大尉と、昼食が済んだら検分に行くことにした。

昼食を終わつて、さあ行こうと腰を上げたとき、工長が徴用工を一人つれて来て、こいつは親の見舞いに国に帰した所、約束より3日も長く休んだので叱つて下さいと云う。私達は丁度腰を上げた所だつたけれども、仕方なく又座つて、10分程その工員に説教して帰し、さあ行こうと又腰を上げた途端に大裏音と共に頭から土砂がふつて来た。佐世保の第一回空襲であつた。私達は机の下にもぐり込んで砂塵の収まるのを待たした。

空襲が終わつてから、見に行くことになつていた防空壕に行つて見た。直撃を受けて完全に潰滅してつた。我々の事務所から防空壕まで約10分の所で、若し工員が来なかつたら丁度防空壕について、中に這入つてつた頃であり、名誉の戦死をとげてつた事であらう。

戦後、この命の恩人とも云うべき徴用工を捜したが、遂に判らなかつた。今でも時々川島氏と、この空襲の日に会つてあれは神様が姿をかえて助けに来て呉れたに違いない、などと云いながら当時を懐かしんで飲むことにしている。

大学に入つてからは、特に強く運命を感じるような事件もなかつたが、昭和18年に受験して落ち、翌年幸い第二工学部が出来たため辛うじて入学出来たこと、卒業の時播磨造船所に就職内定してつたのに、思いも掛けず井口教授に大学に残らないかと云われ、生意気にも僕は勉強が嫌いで、学者には不向きですと云つたら、頭から、君の事は君より俺の方がよく判つているよと云われて結局残り、お蔭で本当に楽しい充実した37年間を過ごすことが出来、又滅多に会えないような立派な先生方と同僚としてつき合わせてつた事など、やはり何となく運命のようなものを感じる。

そんなわけで私はやはり運命論者のカテゴリーに入るのかも知れない。

(元良誠三先生が退官に際して東京大学工学部ニュースに寄せられた
随筆。[東京大学工学部ニュース No.143(昭和57年)])